HEROES インフィニット・ストラトス

D1198

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＥＲＯＥＳ　インフィニット・ストラトス

【Ｎコード】
Ｎ３５０４Ｚ

【作者名】
Ｄ１１９８

【あらすじ】
記憶を失ったオリジナル主人公がＩＳ学園で生活する話です。
オリ設定、オリ人物、性格改変、ハーレム、ご都合設定等々多数あります。
基本的にオリ主視点。文字は多め。
これは好かん、と思ったらお戻りくださいませ。
因みに同名タイトルの海外ドラマとは全く関係無いです。

２０１１／１２／２３

プロローグ

伊豆半島南端、石廊崎から南へ約４０ｋｍ。神津島近海。洋上より１．２ｋｍ。時刻は１８時２４分。太陽が空と雲を赤紫色に照らすその幻想的なキリングゾーンに俺達は居た。

「一夏！そっち行ったぞ！」

銀色のＩＳを狩り損ねた俺は一夏に向かって叫んだ。バーニア全開で次第に青から黒くなりつつある海と銀色の背中と白いＩＳを視界にとらえる。奴まで約８００ｍ、俺は撃ち出した１４発全弾を奴の背中にだけ当て牽制をする。

「うぉぉぉぉ！」

右手に持つ蒼銀の剣をかざし一夏は奴との距離を一気に詰めた。俺は直ぐさま空を切った一夏を狙う奴の頭を狙撃し援護する。

「ちくしょうめ！しぶとすぎだぜ！」

最大速力で奴との距離をとった一夏が吐き捨てた。一夏と俺は中央に奴を見据えながららせんに距離を維持する。

「豆鉄砲（アサルトライフル弾）じゃ奴への牽制がせいぜいか！くそ！」

俺も堪らず悪態をつく。愛機の「みや」がアサルトライフル弾（１２．７ｍｍ）の残弾が残り１カートリッジ（２０発）と警告してきた。

俺が奴の足を止め一夏が必殺の一撃を放つ。もう幾度となく繰り返したが、奴を捕らえる事が未だ出来ていない。原因は俺だ。足止めするのに必要な火力が不足しているのだ。一夏と合流前にアーマーピアシング弾（２０ｍｍ）使い切ってしまった事が悔やまれてならない。自分の迂闊さが恨めしい。

「どうする真！このままじゃジリ貧だぜ！」
奴の攻撃をどうにか躱しつつ一夏が俺の焦りを代弁してきた。みやが示す僚機ステータスを見ると白式のエネルギーは既に４割を切っている。一夏の言うとおりこのまま続ければ２人ともやられる事は明白だ。更に日没までもう時間が無い。俺はともかく夜間の戦闘経験が無い一夏には状況が悪すぎる。
俺は兵装一覧のそれと洋上をちらと一瞥した。俺の意図を察したみやが情報を補完してくる。俺は腹を決めた。
「一夏！仕掛けるぞ！」

俺らは全力で海面に向かっていた。後方の奴をＨセンサーで捕らえながら、海面で俺が隙を作る、と一夏にそれだけを伝える。一夏は軽く頷いて離脱した。
急に視界が黒い海で狭くなる。海面に立った俺はみやに黒釘（１２０ｍｍカノン）を量子展開させる。あざ笑うかのように奴は頭上から致死の雫を浴びせてきた。幾つもの衝撃と水柱の中、俺はそれに構わず狙いを定めた。今は一夏が居る事を奴は忘れている。

有頂天の奴を一夏が切りつけ、その怯みに通常弾（ＡＰＦＳＤＳ）を見舞った。俺の持つ最大級の攻撃だ。轟音と閃光が一瞬辺りを支配し弾は奴を掠めた。ダメージは殆ど無いだろうが、それで十分。奴はこいつの威力を知った。餌は完璧。
「おいおい、あれだけ激しくした相手に冷たくねーか？つれないねぇお嬢さん」
俺のぼやきを聞いたか銀のＩＳが俺に急接近してくる。同じ無視できない攻撃力ならば死に体の俺を先に仕留めるか、正しい判断だ。だがそいつが命取りだぜ。

奴は上空から海と空の極で方向を変え、一気に距離を詰めてくる。

奴を静かに見据え黒釘を構えると、みやが特殊弾の装填完了を告げた。俺が躱しきれない距離まで近づいた奴はその死の翼を広げ形容できない不気味な声を上げた。きっと奴は俺を捕らえたと確信したのだろう、けどな。その瞬間奴の足下で水柱が爆発的に立った。ありったけのグレネードをリモート爆発させたのだ。この辺は適度に浅瀬でな、仕掛けは容易かったぜ。

飛沫に巻かれた奴が逃げようとするがもう遅い。
「覚えとけ、水は案外重い。」
自由が効かない奴を捕らえ俺は引き金を引いた。今度は正真正銘、最大火力だ。発射された特殊弾頭は空気と水を励起させながらコンマ秒で奴に達しその力を一瞬封じる。それで十分だ！

「やれぇぇぇ！いちかぁぁーーーー！」
「今度は外さねぇぇーーーー！！！」
俺の叫びを合図に、閃光の如く一夏がその力を奴に解き放った。

01―01　朝

思い出と言うものは存外いい加減な物だと思う。時と共に曖昧になるし自分の都合に合わせて書き換えることすらある。きっと郷友と語り合う思い出も実はちぐはぐで、内心差異を指摘しあっているに違いない。

こんないい加減な物であるけれども、人にとっては重要で文章に、画像に、動画にと記録に勤しむ。考えてみれば、他人と共有する記憶が思い出であり、思い出というものは人との繋がりその物であり、人は1人で生きていけないと言うならば、なるほど重要に違いない。

思い出を失えば親しい人が他人になってしまうのだから。

では個人の記憶が一切無い上に周囲の人も当人を知らない、この様な状況において人はどのような心境を持つのだろうか。世界に自分1人のみだと孤独感に襲われるだろうか、それとも全てに恐怖し絶望するだろうか。

私はこう思う。逆に開き直って新たに人生を歩み始めるだろうと。人は問うだろう何故断言できるのかと。それにはこう答えよう、それは私の事なのだから。

ＩＳ学園１年２組所属。１６歳。暫定名、蒼月真。

これは思い出を無くした私がいま持つ全てである。

「なら蒼月君は暫く家から通う事になるんだ。」

「あぁ急だったからな。寮の準備が間に合わないんだと。静寂って呼んでいい？」

「だめ。」

「ね、ね、真君ってどこに住んでるの？近く？」

「三崎口駅の近く、１５分ってところ。本音って呼んでいいかな？」

「ここからだと遠いねー。」

「スルーとは酷い。」

私は自分の席で知り合ったばかりのクラスメイト2人と、僅かでも親しくなろうと悪戦苦闘中だ。その2人は鷹月静寐、布仏本音と言った。中々に手強い2人であるが、こうして会話が出来るだけ随分と気が紛れる。クラスメイトが全員女と言う事がこれ程しんどいとは思わなかった。

入学式が終わり自分のクラスにやっとの思いで辿り着いたのが20分ほど前。クラスに唯一の男子生徒である私は到着早々女生徒達から手荒い歓迎を受けた。好奇、嫌疑、その他諸々の感情を含む〆て29人分、58の視線に晒されたのだ。それは予想以上に厳しく、処刑場で加害者を見る遺族の視線とは言い過ぎかもしれないが、それ程強烈な物だった。

これは堪らんせめて一般的な会話ができる仲を、と私は片っ端からおはようと声を掛けたのである。その甲斐あって先の2人と雑談を交わす程度の関係を得ることができた。挨拶は人間関係の第一歩とはよく言うものだが、早々に話し相手を得る事ができたのは幸運だろう。もっとも他の女生徒からの視線はこの瞬間でさえ止むことは無いが、今はこの2人に専念した方が良いと思う。我慢のしどころだ。

それにしても随分と質の異なる2人と知り合ったものだと思う。鷹月さんは挨拶をしたとき小さい声でどうも、と一言あったのみだったので内気な娘かと思った。だが今では気兼ねなく話しかけてくる。案外人見知りなのかもしれん。布仏さんは温和で一見親しみやすく感じるが、人との線引きはしっかりしているようだ。気安く踏み込むと確実に拒絶してくる。そう簡単に心を許してくれそうに無い。　そのような2人の共通点は、随分としっかりしていそうだ、

と言う事であろうか。

ところで、と鷹月さんが姿勢を正して聞いてきた。
「おう、何でも聞いてくれ。でも体重は男の子の秘密だぜ。」
「ばか。聞きたいのはＩＳを動かせた理由なんだけど、結局どうだったの？」
布仏さんもそう言えば、とその目を俺に向けてきた。
「あぁそれね。結局何も分かっていない。あれだけ調べまくったのになぁ。」
「ＩＳ学園の検査でも？」
「あぁ。専門の先生も頭抱えてたわ。結局はＩＳコアに落ち着くんだとさ。」
未だコアは解析できていないものね、と呟く鷹月さんに布仏さんがこう続けた。
「謎々のコアさんに聞いてみるしか無いねー」
私は思わず苦笑した。彼女の言葉にでは無く実際そうする他手段が無いと思われたからである。

ＩＳ、インフィニット・ストラトスと呼ばれるパワードスーツは問題が２つある。１つは女性にしか扱えないこと。もう１つはＩＳの基幹部品「コア」がブラックボックスなのである。
今まで女性にしか扱えなかったそのＩＳだが、最近になって動かせる男が２人見つかったのだ。言うまでも無くそのうちの１人とは私の事で、調査にも関わらず原因は不明。ならば原因はコアしかない、と言う訳である。
今更言う事でも無いのだが、既存兵器をガラクタにしたこれがよく解らないまま使われているのは恐ろしいと思う。男が動かせた理由、何事も無ければ良いのだが。

「言ったろ、何でも聞いてくれ」
ふと布仏さんの視線を感じ私は彼女を促した。彼女は先程から自身の疑問を聞いて良いものか判断しかねていたようだった。私が言うや否や彼女の顔がぱぁと明るくなる。実に和む笑顔だと思う。ただ彼女が躊躇った質問は少々困ったものだった。
「真君の家族はどうなのかな？お母さんとかやっぱり適正高いの？」
「家族、か。あーそれはな、それはなんつーか・・・ない。」
「無い？低いじゃ無くて？」
私の歯切れの悪い回答に鷹月さんが聞いてきた。布仏さんも分からないと言った顔だ。私には記憶が無い。当然家族と呼べる人達を知らない。私自身殆ど気にしていないのだが、気の良い彼女らはそう思わないだろう。まだ間もない彼女らだ。誤魔化すべきだ。だが何故だろうか、彼女らに嘘をつくのは嫌だった。
「覚えてないんだ、身内のこと。」
悩んだ末私は正直に答えることにした。出会ってまだ間もないけれども、彼女らならそれを理由に距離を置かれることは無いだろうと考えたからである。

「ごめんなさい。」
一転、布仏さんが今にも泣き出しそうな顔で謝罪をしてきた。鷹月さんも神妙な顔をしている。
「いや、気にしないでくれ。俺も気にしてない。そんなに気にされると逆に俺が気にするって。」でも、と続ける布仏さんに私は手で制止し、続けてこう伝えた。
「知らないってだけで、どこかで生きてるかも知れない。世話を焼いてくれる人も居るから1人って訳じゃない。だから寂しくない。更に、」2人を見据えて私は笑いながらこう告げた。
「更に優しい友人が2人もできた。」
そうだ。私を気遣ってくれる彼女らに嘘をつくのはあり得ないだろう。

どう反応したら良いのか分からないのか、きょとと2人が互いに目を合わせた。「そうだな、それ程気に病むなら代わりに今度デートしてくれ。それでチャラにしようぜ。あぁ勿論3人でな。」暫しの沈黙の後、私のにやついた顔を見て理解したのか2人は眉を寄せた。

「真君ひどいよー本当に心配したのにー」

「待て待て、その場を和ませようとだな。」

「心配して損した。」

「悪かったって！というかその眼怖いから！」

どうにか彼女らの機嫌を取り戻せたらしい。怒っていてもその雰囲気は和らいだ。ならば平謝り位なんという事はない。しかし怒っていても可愛らしい布仏さんに対し鷹月さんの冷ややかな事。この娘に冗談は控えた方が良いかもしれん。私は本当に良い友人を得たようだ。

そしてＩＳ学園とはそのＩＳを学ぶ世界唯一の学校である。その女ばかりの学校に今私は居る。

０１－０２　ショートホームルーム

「相川清香１５歳！乙女座のＯ型！好きなことは体を動かすこと。好きなタイプは誠実な人！ハンドボール部入部予定！みんなよろしく！」

始業式の定番、自己紹介が行われている。近年は名簿順に関し色々意見があるようであるが、結局はひらがな順で行われる事が多いそうだ。ＩＳ学園でもその例に漏れずその順で、早々に相川さんが自己紹介をしていた。

それはともかくと、暫く前にクラスに来た壇上の女性２人に目をやる。担任のディアナ・リーブス先生と副担任の小林千代実先生である。金髪碧眼、淡い桃色のワンピースでゆったりした出で立ちのリーブス先生に対し、濃紺のパンツスーツで黒い髪を後ろで１つにまとめ隙の無いのが小林先生だ。２人とも髪が長いこと以外類似点がない、随分と対照的な２人である。

私はその彼女らとこれが初対面では無い。今から１年程前ちょうど今時分だろうか。私は短い間であるが、とある理由でこのＩＳ学園に滞在していたことがあった。その時彼女らと面識を得たのである。滞在と言っても事実上軟禁状態ではあった事は付け加えておく。

当時のことを思い出すと、あの２人が担任とは喜んで良いのか嘆くべきか判断に悩むところだ。小林先生はともかく私はリーブス先生を多少苦手としていた。特に何かされたという訳では無いが、とにかく調子を崩されるのである。

それにしても先程から隣が随分と騒がしい。１組であろうか。

タブレットを見ながら彼女が「次は真ちゃんね。自己紹介なさい。

」と促した。リーブス先生は多少苦手なのである。いくら何でもちゃん付けは無いのでは無いか。抗議したところで聞き入れて貰えぬ事は身に染みている。はいと、喉まで出かかった不平を飲み込み私は立ち上がった。

皆の視線が集まるが最初よりは随分と視線が柔らかい事に安堵を覚える。苦労の賜である。後ろから真君がんばれーと激励が聞こえた。

「蒼月真です。皆さんご存じかも知れませんが男の適正者で2人目の方です。」

織斑君が良かったー、残念ー等々感想が声が聞こえる。鷹月さんと布仏さんも心なしか表情が硬い。失敬だな君ら。小林先生が咳払いで彼女らを注意する。

「メディアでは随分と騒がれましたがＩＳに関しては初心者同然です。既に勉強を始めている皆さんには及びません。」

あれ意外にまじめ？と鷹月さんが私を見上げている。よし、彼女には後ほど念入りに念を押す。

「とは言え、ここい居る以上全力で取り組みたいと思います。色々あるかも知れませんが皆さん1年間よろしくお願いします。」

ふと気づけばクラス中が静まりかえっていた。鷹月さんはぼぅと見ているし、布仏さんはきょとんとしている。はて、何かおかしなところが合っただろうか。小林先生はうんうん頷いている。特におかしいところは無さそうであるが。

「真ちゃん、自己紹介にしてはまじめ過ぎかしら。」

「先生、俺は真面目なんです。」

「折角の男の子なのだから、そうね、好きな女の子のタイプとか答

えて貰おうかしら？」
何故そうなるのか。私の話を聞いて貰いたいのだが。それよりも何故そのような事を答えねばならないのか。
クラス中の少女らがその目を爛々とさせながら私を見ている。そうか、好きなのだなその手の話が。ＩＳ学園の生徒といえども変わらないのだな。小林先生に救いの手を求めるが、あからさまに逸らされてしまった。彼女達の期待に満ちた眼を見る。逃げる事は難しそうだ。
腹を括るにしても一体どうしたものだろう。下手に答えては後々禍根を残しかねない。誰もが納得する普遍的な女性・・・一瞬あの人の姿を浮かべてそれを言うのやめた。リーブス先生がにこやかに私を見ている。これが狙いか。流石に他所の担任の名を上げるのは適切で無い。かと言ってリーブスの名を出すのは後々恐ろしい。

思案の後私は「裏表の無い素敵な人です」とどうとでも取れるように答えた。
「えー男らしくないー」や「サイテー」、わいわいがやがや言われたい放題であった。理不尽である。
ここまでにしておきましょ、と不満顔なリーブス先生を私は抑えてそれと、と続けた。１つ彼女らに伝えておかねばならない事がある。機会としては今が適切であろうと思った。先生が何か言うかも知れないが、いずれ知れることだ。問題ない。
「それと私は皆さんより１歳上の１６歳です。僅かですが社会人経験もありますので悩み事があれば気兼ねなく相談してください。」
「「えーーーー！」」
一拍の後彼女らの大合唱が響いた。君ら隣クラスに迷惑だぞ。
「うそ・・・」鷹月さんが呆然としている。
「と、年上？」「信じらんない」「言われてみれば・・」等々感想

が聞こえる。
真君はおにーさんだった・・と流石の布仏さんも驚きを隠せないようだ。そんなに幼く見えたのだろうか。小林先生が予想通り睨んでいる。リーブス先生は予想通りあらあらと笑っていた。

ふと視線を感じそちらを見ると我に返った鷹月さんであった。目が口程にものを言う彼女は彼女はただ一言こう言った。
「蒼月君、留年したの？」
失敬な娘である。

０１－０３　出会いと再会

１限目の後、最初の勤めから解放された私は、ノートを見直す暇無く彼女らから質問攻めを受けていた。

「ほんとびっくりしたよ。真く・・・先輩」
「年上でも同学年なんだ。気にしないでくれると助かる。」
「なら、そうさせてもらおうかな。」
「というより、敬語は舌噛みそうだしな。布仏は。」
「真くん、それひどいー。」

私らのやりとりで鷹月さんがくすくす笑っている。年齢のカミングアウト。博打では無いかと内心心配であったが上手くいったようだ。他のクラスメイトからも眼を背けられるような事は無くなっている。

意外な事だが、仕事に強い関心を持ったのは布仏さんであった。ＩＳ機械関連と知るや否やすごい食いつきで、本当に意外だ。布仏さんは機械に興味があるのだろうか。奇特な娘である。考えればまだ彼女らの事を殆ど知らない。そろそろ私から質問したいところではあるが、まぁ追々で良かろう。

一呼吸の後、互いに言葉を交わす彼女ら２人を見る。鷹月さんと布仏さん。あの出来事から数時間しか経っていないはずだがここまでの道のりの長い事。本当に一時はどうなる事かと思ったが、大げさにも実は夢では無いかと疑ってしまう。

どうしたの、と鷹月さんが不思議そうな顔で私を見てきた。随分と柔らかい表情だ。先程の視線の中にこの２人のものもあったのだ。今の彼女らのと比べるととても同一とは思えん。そんな私の感傷に

彼女らは実にあっけらかんとしていた。だってねぇ、と眼を合わせ同意を確認する2人。

「なんだよ。はっきり言えよ。」
「ちょっとこわいかなーって思うよ。」
「怖いって、俺が？どこが？」
「特に目付き。はいこれ。」

鷹月さんが差し出した折りたたみ式の手鏡で自分の顔を見る。黒髪、黒眼・・・特に変わったところは無いと思うのだが。多少釣り眼とは思うけれども。そういえば営業の垣田さんに営業は駄目だとか言われたが、そういう意味だったのだろうか。それにしても彼女らは随分と酷い事を言っておらんか。

「そりゃー織斑一夏より爽やかとは言わんけどさー・・・」
織斑・・・失念していた。
「2人ともスマン、1組行ってくるわ。」
「1組？」
急に立ち上がった私に少し驚いた顔で鷹月さんが聞いてきた。
「織斑一夏に会ってくる。」

私はどちらかと言えば人混みを苦手としていた。その多さ故にその人物を注意するべきだどうかの判断が困難だからである。何故注意する必要があるのかと聞かれると回答に困るのだが、とにかくそうしてしまうのである。今でこそ大分落ち着いたのだが以前は町を歩く事すら難儀であった。物陰伝いで移動する、すぐ人の死角に移る、会社のおやっさんにお前は忍者か？と殴られたのはそれ程古い

記憶では無い。

話が外れたが、私が言いたい事はつまりこうだ。廊下に溢れんばかりの、人、ひと、ヒト、ごった返していた。姦しいにも程が無かろうか。

「なんだこれ。」

「皆おりむーを見に来ているんだよー」

意図せず口から漏れた感想に布仏さんが説明してくれた。彼女らは皆一様に1組の中を覗いている。面白そうだからと付いてきた布仏さんも少々あきれ顔だ。鷹月さんは興味が無いからと来なかった。因みにおりむーというのは織斑の事らしい。

「上級生も混じってるな。猫も杓子も織斑か。妬けるねぇ。」

見れば2組の生徒も見かける。妙にクラスが閑散としていたのはこういう理由であったか。織斑一夏の人気具合が分かろうと言うものだ。かくいう私はどうかと言うと、あ、と近寄るが織斑でない事が知れるとそのまま立ち去られてしまう。

まだ見ぬ織斑に妙な対抗心を燃やした私は、丁度通りかかった眼鏡の娘におはようと声を掛けると足早に逃げられた。

「真くん、女の子を怖がらせちゃ駄目だと思うよ。」

今の私の心境をどのようにしたらこの温和な少女に伝えられるだろうか。

私は人混みを押しのけ何とか1組に入ろうと悪戦苦闘していた。彼女たちはクラスの中に注目している為なかなか気づいて貰えないのだ。一度無理に押し通ろうとしたのだが、彼女らの感触があまりにも困惑的であった為諦めた。変質者扱いされると厄介な訳で、決してその時の布仏さんに気圧されて断念した訳では無い。

とは言えここでじっとしている訳にも行かず、

「ねぇねぇ彼が噂の男子だって～」「ごめん道開けてくれ。」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」「道開けてくれないと、」

「やっぱり彼も強いのかな？」「触っちゃうぜ。」

瞬間人垣がざっと2つに割れ道が出来た。狙い通りである。だが布仏さん、その賛辞は辛いから遠慮してくれると助かる。

とにかく織斑を確認しようと、丁度鉢合わせた背の高い少女に取り次ぎを頼んだ。すると、どう言う訳かその少女はえらい剣幕で私を睨んでくるのである。はて何か彼女の気に障る事をしたのだろうか。彼女とは少なくとも初対面の筈である。今のやりとりにおかしいところも見当たらない。

「箒、どうしたんだ？」

少女の態度について思案していた時、その声は発せられた。それは少女の後ろからであり、そしてそれは男の声だった。そいつはそこに居た。そいつは私と同じ黒髪、黒眼、背格好も私と同じぐらいか。ネットで見た画像の通り、間違いない。そいつはあの織斑一夏だった。

向こうも私に気づいた様で連れの少女を脇に促し鼻先に歩いてくる。なるほど随分と良い面構えをしている。女子が騒ぐのも分かろうと言うものだ。私も織斑を背筋を正し見定めた。

「織斑一夏で間違いないな？」

「蒼月真だな？」

互いが回答を待たずに続ける。もとより期待などしていない。

「ようやくご対面だな。随分と探した、織斑。」

「それはこっちの台詞だぜ蒼月」

織斑の顔を目を見る。織斑もまた私を見返していた。私たちの放つ一触即発の雰囲気に、あれほど騒がしかった周りが静まりかえっている。空調の動作音が聞こえる。私が踏み出すと同時に織斑も踏み出した。誰かが固唾を飲み込んだ。

そして私たちは―

「「幽霊じゃ無い！」」

互いに両手で肩をつかみつつ、その存在を噛みしめる。声か音かよく解らないが教室に大きな音が鳴ったと思えば、見渡す女子達がその姿勢を崩していた。何があったのか。だが今はそれどころで無い。

「いやー、やっと会えたな蒼月。本当は居ないんじゃ無いかと不安だったんだぜ。」

「俺もだよ。入学式から探しても見つからなかったからな。」

男だ。男である。自分以外のもう一人の男。自分でも意外な程、興奮しているのが分かる。誰に何度聞いても要領を得なかったもう一人の、織斑一夏がこうして目の前に居るのである。誰が責められようか。

「しかし良かった。本当に良かった。1人じゃ無いんだな俺。」眼に涙を浮かべた織斑の肩に手を掛け「わかる、わかる。そうだよな。最初はどうなる事かと思ったよな。」私も今朝を思い出し涙ぐんだ。

「蒼月真。2組。よろしく頼む。」

「織斑一夏。ご覧の通り1組だ。堅苦しいのは苦手でさ、一夏でいい。」

「なら俺も真で頼む。」

改めてしっかり握手を交わす。これがこいつ、一夏との出会いだった。後になって思えば随分と締まらない出会いだったと思う。

周囲の冷たい視線に気づいたのか一夏が多少顔を赤くしながら聞いてきた。

「ところでさ真、入学式どこに居たんだよ。俺も探したんだぜ。」

「あぁ最後尾の一番左でな。とても寒かったよ。」

「何でそんなところなんだよ。」

「偉い人に聞いてくれ。そう言う一夏はどこだったんだ？」

「最前列の一番右。」

「Ｖｉｐ席だな．．．」

入学式は体育館を一時的に式場にする歴史ある方法で行われた。大量の折りたたみ椅子を並べる方法である。その私の席は下座も良いところだった。監視カメラの数台が死角になる席であった上に、窓から建物が見えた。幸いにも人影は見えなかったが、学園が私をどう扱っているかよく分かろうものだ。

ふとあの人の顔が浮かんだ。そうだな、厳しいあの人がそういう事を良しとしないのは確信を持てる。例えそうで無かったとしても、あの人に助けられた命だ。役に立つならそれも良かろう。

「何でそんなに離れてるんだよ。隣にすれば良いのに。そもそもクラスだってさ何で別にするんだか。」」

「お前らがつるんで悪さしないようにだ、馬鹿者ども。」

出かかった私の答えを遮ったのは、あの人の声だった。絶対に忘れる事の無い、あの人の声だった。

「千冬さん？」

「織斑先生だ」

振り返りざま、痛みの生じた頭をさすりつつ彼女を見た。彼女は黒のスーツに黒のタイトスカートをまとい、仁王の如く立っていた。その美しくも恐ろしい姿は何者も抗いがたく、尊大にして傲慢。そして何よりも優しい。私の知る彼女がそこに居た。

状況が理解できないのか一夏が何度も彼女と私を交互に見やっている。

「予鈴はなったぞ、クラスに戻れ蒼月。」

右手の帳簿を振りつつ指示する彼女に、はいと答え1組を出た。一夏に後でと去り際伝える。布仏さんも廊下の女生徒もいつの間にか居なくなっていた。

そうか、あなたは1組の担任か。近くなく遠くなくですか。千冬さん。

０１－０３　出会いと再会（後書き）

物語時間ではまだ１限目後。
中盤の一夏とのやりとりは敢えて詳しくしました。
ご意見あればください。
次回から展開速度を上げる予定です。

２０１１／１２／２６　一夏、千冬登場の前後を直しました。

０１－０４　過去

「大丈夫か。」

曖昧な当時のことで私に向けられたこの声だけは今でも鮮明に覚えている。その声の主は織斑千冬。それが彼女と私の最初だ。

約１年前の今頃、私はＩＳ学園で保護された。と言っても当初の記憶は曖昧で殆ど覚えておらず、明瞭となったのはだいぶん後になってからであった。だから最初の頃は大半が彼女からの聞きづてになる。

聞くところによると私はアリーナ近くの茂みに全裸で倒れていたらしい。体中血がこびり付いていたそうだが不思議と怪我は無く、頭髪、眉毛など体毛が薄毛でまるで、生まれたての赤子ようだったと彼女は言っていた。

私は自分に関する記憶を失っていたが、幸いにも理知と言葉は残っていた。ただ私の持つ世間常識が微妙にずれていたのは奇妙な事であった。記憶障害よるものらしいが実際のことは分からない。

当初学園は国の施設に預けようとした。私は身分を明かす物は無く、更には国民登録も無かったためである。仮に私が学園の立場であれば同じ様にするだろう。ところが彼女がが調査を強く申し出たため暫く学園に滞在することになった。

その調査の途中、偶然にもＩＳ適正があることが判明したのである。学園内は大騒ぎとなった。それまでの常識、男には使えないと言う事実が覆されたのであるから、無理も無い事だとは思う。尚、これは男の適正者第１号は織斑一夏では無く私と言うことを意味す

る。念のため断っておきたいが、私は順位に執着していない。

当初学園側は世間への影響を考え秘匿とするつもりでいた。私も騒がれる事はよしとしなかった為、渡りに船とそれに応じた。ただその対価として自活する手配を求めた。学園もそれに応じ、私に日本国籍と自活を始められる当面の資金を用意、社会適応できるように訓練する事になった。

それから2ヶ月後、私は学園からそれ程遠くないところに居を構え地元の中小企業で働き始める。近くになったのは学園の顔が聞く企業が多いというのもあったが、彼女の希望でもあった。私は不思議に思ったが、他ならず恩人であるその人の意向を受け入れた。

その会社は町工場であったが技術力が高く学園からの部品・装置の受注や共同開発を行っていた。部分的ではあったが私もそれに携わり学園には幾度となく訪れた。私が入学間もないにも関わらずＩＳ学園に通じているのはその為である。

互いに多忙の身であったが、彼女とはそれなりに連絡を取り合っていた。退屈だが平穏なこの生活がずっと続くのであろう、と疑いもしなかった。

年が明けて暫く仕事にも慣れ始めたかという頃である。織斑一夏が、男の適正者として世間に知られたのである。その世間の騒ぎようは凄まじく彼が静かな人生を送ることは想像難くなかった。その時には彼が彼女の弟である事は既に知っていた。流石の彼女も動揺を隠せないでいたようだった、電話越しでも彼女の動揺を感じ取れた。恩人を、彼女を支えられない自分が歯がゆかった。

そして私も世間に知られた。学園の情報セキリュティを全て洗い

直ししたそうだが、何故情報が漏れたのか結局解明できていない。私の場合発見から公表まで間が合った事が事態を複雑な事にした。私の保証人となった彼女の負担は想像に難くない。彼女には何度も謝罪したが、気にするなとしか言わなかった。

告白しよう。私は公表された事に感謝している。彼女の側に居られるのだ。これでようやく彼女に報いる事が出来る。これが恋なのか恩義なのかは知らない。

だがそれで十分だろうと思う。

０１―０４　過去（後書き）

進展するとか言っておいて、全く進みませんでした。
申し訳ないです。
ただこの話はここに入れるが一番適切かと思いました。

それと一気にアクセス増えて腰抜かしております。
読んで下さった方、ありがとうございます。宜しければ引き続きおつきあい下さい。

02―01　篠ノ之箒1

気になっている事があった。一夏と居た少女だ。一夏に会いに行った時、彼女は私に酷く憤慨していた。恐らく私が、そうさせた。

あの時一夏はその少女を「箒」と呼んだ。学年名簿を見たら、篠ノ之箒とあった。苗字でない。つまり篠ノ之さんと一夏はあの時点でそれなりに親しい仲だった。あの時の様子から恐らく篠ノ之さんと一夏はどこかへ行くところだったのだろう。私はそれに気づかず、彼女に水を差した。だから怒った。浮かれていたとは言え、完全に私の落ち度である。詫びを入れよう。

彼女の姿を思い浮かべる。飾りっ気も少なく真っ黒な髪を頭の後ろで1つにまとめ、ポニーテールにしていた。なかなかに可憐な少女ではあった、そうだな、笑っていれば言う事なしだ。

切っ掛け、には昼時が良いだろうと少し遅めに食堂に行った。今日のところは詫びのみで済ます予定だ。篠ノ之さんの気性を考えれば、手身近の方が良い。ちなみに事が済み次第鷹月さんと布仏さんに合流する予定だ。

程なく2人を見つけた私は早速話し掛けた。都合良く窓際の4人掛けテーブルに向かい合って座っている。まず一夏に話し掛け、紹介を促しその後謝罪という算段である。一夏にも用があるので一石二鳥だ。一夏のはついでだが。

「よう、一夏」
「一夏は今私と食事をとっているのだが！」
開口一番これである。正直、頭ごなしに怒号は予期できなかった。気が強いどころの話ではない。一夏はよく平気なものだ。見れば一夏は臆す事無く彼女をたしなめている。一夏は大物になる、将来が楽しみだ。単に鈍いだけかもしれんが。
今なお睨み続ける篠ノ之さんは、伸びた背筋に、整っているが鋭い眼差しは可憐より凛々しいが適切だった。そしてその眼光の鋭い事。おおよそ１５歳の少女らしからぬ威圧である。気が強いにも程がある。竹林だが、武家屋敷だかそのようなところに、和服姿で日本刀を手に佇む篠ノ之さんを想像して、少し寒気を覚えた。流石に堅気で無い、と言う事は無かろうが。気の強い娘が好みという男は彼女を見てどう思うのか、機会があれば聞いてみたい。
「えーと、君。」
「私は君という名前ではない！」
彼女に叩きつけられたテーブルが音を立てた。この娘と無理して和解する必要は無い、一瞬よぎったその考えを、彼女の顔を沸騰しているやかんに置き換えて、気を静める。しまった。今度は逆に笑いをこらえるのが大変になった。
「なら名前を教えてくれ。俺は蒼月真。知っていると思うけど。」
彼女は私を一瞥し、一言「篠ノ之」と答えた。
「ありがとう。で、篠ノ之に用件が２つ。１つ目はさっきはごめん。一夏とどこかへ出かけるつもりだったんだろう？」

視線はそのままに篠ノ之さんがぴくりと動いた。原因は予想通りと言ったところか。彼女は無言のままだが、誠意は伝わったようである。この件はとりあえずはここまでだろう。

「2つ目、少し一夏と話して良いかな？手短に済ますからさ。」

篠ノ之さんは外を見たまま無言だ。了解を得たようだ。これで少しは落ち着く良いのだが。彼女に悟られないよう、一息ついた私は一夏に話し掛けた。

「一夏も一週間自宅通いだろ？今日の放課後つきあえよ。」
「お、あぁ。分かった。」
「んじゃま、また後で。」
「なんだよ、一緒に食べようぜ。」
「一夏、今日は俺の顔立てさせろって。それに俺も人を待たせてるからな。」

空気を読まない一夏も私の視線の先をみて、理解したようだ。

「そっか、じゃまた放課後。」

本番は明日だ。上手くいくと良いのだが。

テーブルに着いた私は遅れた事を軽く詫びて昼食にありついた。
2人はわざわざ待っていてくれたのである。全く持ってありがたい。
特に篠ノ之さんとの後は特にそう感じる。気の強さとは関係ないが。
因みに鷹月さんは和食、布仏さんと私は洋食定食であった。時間も無いため3人とも黙々と食べていたが、好奇心を抑えきれなくなったのか布仏さんが聞いてきた。

「真くん、おりむーの隣の人、随分怒っていたみたいだけど、どうしたの？」
「・・・人付き合いは難しいって話。」
「蒼月君、彼女に何かしたんでしょ。」
「鷹月は俺に怨みでもあるの！？」

私とて人に気を遣っているのである。

02－02　篠ノ之箒2

授業も全てが終わり、鷹月さんの布仏さんにその日の別れを済ませて、さて帰ろうとした矢先一夏が血相変えてやってきた。
随分と慌てているようだ。恐らく電車、リニアレールの最終便を勘違いしているのだろう。学園は都市部から離れている。その唯一の交通手段がリニアレールだ。困った事に最寄り駅の三崎口駅行は平日は18時が最終となる。これ以外の交通手段を持たない学生は事実上軟禁という訳だ。酷い話である。

「真！」
「ちょっと待ってくれ。すぐ行く。」
「大変なんだよ！」
「時間はまだ大丈夫だって。」
「俺達女子寮なんだよ！」
「・・・は？」
カラスが鳴いた。

「すいません、重要な事なのでもう一度言って貰えますか？」
「耳が悪くなったようだな蒼月。ではもう一度言う。今日から女子と寝ろ。」
「織斑先生、その言い方は色々問題があります・・・。」
一夏に連れられた先の1組に待っていたのは千冬さん、織斑先生と山田先生だった。山田先生は1組の副担任と聞かされた。彼女ら

から告げられた内容は本日より寮で生活しろとの事だった。どうやら数日前に政府から通達が来たらしい。

生徒寮と言ってもセキリュティの塊である。僅か2人のためにもう1つ作れと言われてもそうはいかないと言う事だろう。そもそも一ヶ月やそこらで作れる代物でもない。男子寮を曖昧にしていたのは、この為だったのか。見れば山田先生は随分疲れた顔をしている。再部屋割大変だったのだな。ご苦労様である。

思いの外、政府から大事にされているようではあるが教育機関としてそれは問題ないのか。それを聞こうとしたが織斑先生の目を見てやめた。言われなくても分かっている、と如実に語っていた。

しかし流石に今日は無茶だ。日用品もある。冷蔵庫のアイスも惜しい。一度帰宅させて下さい、と言おうとした矢先、頭に痛みが走った。私の涙目の抗議に対する彼女の回答は、帰宅は週末まで我慢しろであった。何故分かったのだろうか。何故一夏も涙目で頭をさすっている。何故人の拳がこれ程痛い。

「日用品と文房具は売店で買え。テキストは今日貰ったな。着替えは今日中に手配してやる。他に質問があれば言ってみろ。」

「ありません・・・。」

これ以上手間を掛けさせるなと言わんばかりの物言いだった。それに気づかない一夏はせめて漫画をと言いかけもう一発貰っていた。彼女に逆らう事自体愚かだったのだ。

教室がある学習棟と寮は約５０メートル程の道でつながっている。煉瓦を敷き詰めた並木道である。幅は８メートル程度、脇にはベンチもあれば、ガス灯もある。何とも洒落た道だった。その道を山田先生と、一夏と私と、見知らぬ少女たちが歩いていた。彼女らは確認するまでも無く一夏狙いの娘達だろう。うらやましい限りだ。私たちは山田先生の案内でその寮に向かっている途中だ。織斑先生は用は済んだと、どこかに行ってしまった。

ＩＳ学園の寮は１年と、高学年で建屋が異なる。最初はとにかく慣れろという事か。１年寮を柊寮、高学年寮を楓寮と呼ぶが、由来は知らない。食堂は各寮に１つずつ。因みに高学年の食堂は式典に使われる事もあり、そのメニューの数と味は１年の物より良い。私が社会人時代、時々使ったのが楓寮の食堂だ。無論、寮となる２階以上に行った事は無い。１年とはいえその禁断の地に赴くのである。少々緊張してきた。

その私の心の状態を知ってか知らずか隣を歩く一夏が話し掛けてきた。

「そうだ真、お前年上なんだって？」
「あぁ、誰から聞いた？」
「隣のお下げの娘」
「一夏、お前隣の人ぐらい名前覚えてやれよ。」
「分かってるって。で、敬語にした方が良いか？」
「いや、今まで通りで頼むわ。」
「りょーかい。」

この話はこれっきりだ。男はこれだから助かる。根底の価値観が同じなのだ。本当にありがたい。

「ところで、その話はいつ聞いたんだ？」

「1限目後の休み。」

「そんなに早いのかよ！」

それを話したのは1限目前のショートホームルームだったはずだ。噂は早いと言うが、恐ろしい。

あてがわれた自分の部屋は最上階の端、712号室だった。部屋は以外と広く15畳程あった。ベッドに座り一息を付く。これでよかったのだろうなと、主が居ない廊下側のベッドを見る。恐らくこの部屋は唯一の一人になれる場所だ。そう考えると、かえって良いかもしれない。2人用の部屋を1人で使うと思いの外広く感じるが、じきに慣れるだろう。思いの外、同室の友を期待していた自分を戒める。

不必要な外出は避けるつもりでいたが、今朝鷹月さんに借りた鏡をそのまま持ってきてしまった事に気づいた為、結局は出かける事にした。それに彼女らに挨拶をしておくのも悪くない。ついでに一夏の部屋に押しかけよう。たしか706号だったはずだ。

私は苦労する事無く布仏さんに再会した。部屋を出ようと扉を開けるとそこの彼女が居たのである。名前で呼ぶ事を目論んでいる私はつい彼女を本音と呼んでしまったが、彼女は少し考えて「良いよ」

と言ってくれた。本当に良い娘だ。その着ぐるみ姿は気になるが。彼女は「これかわいいでしょ」と同意を求めてきたのでとりあえず同意をしておいた。可愛いは可愛いが何かが違う。表現が貧弱な自分が恨めしい。因みに布仏さんは７１１号、つまりお隣さんだった。

布仏さんに借りた鏡を返す旨を伝えると鷹月さんの部屋を快く教えてくれた。６０４号だそうだ。付きそうという彼女に１人でも大丈夫と言ったら心配だからと付いてきた。僅か１フロア下である。何が心配なのだろうか。

ところで一夏はなぜ扉相手に土下座している。

布仏さんがブラウンの扉をノックし、部屋の主に声を掛けた。その主の１人は直ぐ出るからと答えた。多少周囲の視線に耐えて待つ。扉がカチャリと音を立てた。

突然だが、大事故というのは単純な事故が偶然にも積み重なって起こるそうだ。仕事に関係した事もあり教材で見た事がある。確か題材は飛行機であったか。その教訓は小さい事を軽んじてはならない、と言う事だ。

例えばこうである。
偶然にも、空調の調子が悪いのか少し暑い。
偶然にも、突然の部屋替え後にも関わらず布仏さんは既に部屋を知っていた。
偶然にも、男の私では無く女の布仏さんが呼び出した。
よくよく考えてみれば、鏡を返すのは明日でも良かった。

カーキ色の、ロングキャミソール１枚の鷹月さんを見てそう思うのである。

０２－０２　篠ノ之箒２（後書き）

箒編にもかかわらず登場なし。スミマセン

次回、箒編の最終話。

年内間に合うか・・・それは年末準備（部屋の片付け）と電車の時間できまります。

間に合わなかったらごめんなさい。

02－03　篠ノ之箒3

今私たちは5人で朝食をとっている。篠ノ之さん、鷹月さん、布仏さんに一夏と私だ。コの字型の席で廊下側に篠ノ之さんと鷹月さんが、布仏さんと一夏が面するように座っている。私が上座だ。2組が遅れてきた1組を招いた格好になっているが、昨日の夕食時に遅めにくるよう一夏に伝えておいた。詫びもかねて篠ノ之さんに多少の節介を焼く、と言うのが目的である。

その筈だったのだが、皆黙々と食べている。快晴の朝にも関わらず空気が重い。ちよちよちよ、とさえずる窓の小鳥が空回りする芸人のようだ。先程から何度か話題を振っているのだが一向に好転しない。

鷹月さんを見る。彼女は先程から一言も無い。昨日のあの後、鷹月さんから左頬に良い物を貰い、謝り倒し、布仏さんの説得もあってとりあえずその場は納めて貰った、のだが黙々とナイフとフォークを動かしている。まだお許しは頂けないようだ。

人生初の土下座した相手が15歳の少女だったとは誰にも言えない。

しかし篠ノ之さんの機嫌まで悪いのは一体どうした事か。黙々と箸を動かしている彼女はむしろ昨日より悪いように思う。ちらと一夏を見るとこいつは目をそらした。一夏め、彼女に何かしたか。人の苦労をどうしてくれる。

私がどうした物かと思案していると一夏が唐突に口を開いた。

「そういえば真は部屋、誰と一緒になったんだ？」

かちゃり、鷹月さんの手が止まった。私は一夏の言っている事が理解出来なかった。何だそれは、一夏以外にこの学園で男は私だけなのだぞ。まるで私以外の生徒と同室になったような言い方ではないか。結局昨日は一夏の部屋に行けなかったのだが、まさか同室者が居るのではあるまいな。

この男は事も無げに言い放った。

「俺は、箒と一緒なんだけど。」

「一夏！家庭の事情をばらす奴がいるか！」

篠ノ之さんが急に立ち上がり、顔を真っ赤にして声を荒らげた。布仏さんが2人一緒なの、と口元を両手で隠しながら少し赤い顔で質問すると、篠ノ之さんは更に顔を赤くして、口をぱくつかせた。鷹月さんも目を丸くして彼女を見ている。

どうやら一夏には同室の友がいて、そしてそれは篠ノ之さんらしい。冗談、という訳でも無さそうだ。篠ノ之さんも家庭と言う辺りまんざらでも無さそうであるが、いくら何でもまずくはないか。男女七歳にして、と正論かざすつもりは無いが子供でも出来ようものなら一大事だ。何を考えているのかあの人は。

そんな大した事じゃないだろ、と言う一夏に篠ノ之さんが同じ赤い顔だが、少し違う赤で一夏の頭に手刀を下ろす。一夏の馬鹿め。

「それで、蒼月君は、誰と、一緒なの？」

鷹月さんが食器を持つ手も顔もその姿勢も変えず聞いてきた。騒いでいる2人が静かになり、私は何故か肝を冷やした。

「俺は1人だけど。」

「蒼月君、嘘は許さないよ。」

「・・・本当だって。本音も知ってる。」

思わず後ずさった私は布仏さんに助けを促す。本当だよ、と私の無実を晴らしてくれた彼女は、平然と朝食を食べながらまた非常に厄介な事を言った。

「だって真くんは隣だし。」

耳障りな音がした。フォークとナイフを陶器の皿にこすりつけた音だと分かるのに時間を要した。鷹月さんがそれを持ったままゆらりと立ち上がった。

「嘘は駄目って言ったよね、私。」

「違う！隣の部屋！本音も正確に言う！」

「さっきから本音って呼ぶよね？いつの間に？」

「鷹月の聞きたい事って何！？」

私を見下ろす彼女の眼が濁っているように見えるのは気のせいか。篠ノ之さんと一夏に助けを求めると、二人は青い顔で目をそらした。

彼女を見る。彼女は怒っている。彼女は何を怒っているのか。そもそも何故布仏さんは私を窮地に陥れるような事を言うのか。いや、何故私は窮地と思うのか。状況を洗い出しても原因が見当がつかない。一体何がどうなっている。思考の堂々巡りに陥っている窮地の私を救ったのもまた布仏さんだった。

「ほんと、私たち大変だよねー。」

しばらくの沈黙の後、鷹月さんがすとんと座った。意味ありげな彼女の言葉をどのように解釈したのか、篠ノ之さんと鷹月さんが口を押さえくすくす笑い始めた。つられて布仏さんも笑い始める。

状況を理解出来ず残された男2人。気恥ずかしさやら、憤りやら、安堵やら、なにやら、ただ呆然と見合わせるだけであった。

食堂を後にした私たちは自分の教室に向かっていた。その時に篠ノ之さんと一夏は幼なじみという事を聞かされる。劇的にかどうかは知らないが、再会した2人はどこかに行こうとした矢先、私に邪魔された訳だ。なるほど、それならばあの怒りも分からなくも無い。

学習棟の2階の廊下、その先に1－1、1－2のクラス番号が見える。朝特有の喧噪がこの学園にも満ちていた。そろそろこの2人とも一時のお別れだ。

隣を歩いていた一夏が突然礼を述べた。

「箒ってさ、ああいう性格だろ？クラスでも浮いてて心配してた。」
「別に何もしてないさ。あわよくばとは思ったけど。」
「んな事はねーって。箒のあんな笑った顔小さい頃でも見た事無い。礼を言わせろよ。」

少し前を歩く3人を見る。随分打ち解けたようで楽しそうに話している。中央が背の高い篠ノ之さんというのはバランスが良い。因みに左が鷹月さん、右が布仏さんだ。何を話しているのだろうか。

「俺たち大変だな。」

一夏がそう言うと、私は全くだと笑って答えた。実際にはなんて事は無い。箒で良い、そう篠ノ之さんが言った時の彼女の顔を思うかべると本当に大したことない、そう思う。

ふと廊下の窓から外を見る。空が高い、今日も良い日でありますように。私はそう祈らずにはいられなかった。

０２－０３　篠ノ之箒３（後書き）

箒編はこれにておしまいです。如何だったでしょうか。
１１月末から勢いで作り始めたこのシリーズですが、
年の節目もあり、ほっとしています。

見直すと色々直したいところがあるのですが、
とりあえずは放って先に進めようと思います。

　性格改変の静寐と本音ですが、
静寐がツッコミ専門にならないように、
本音はボケ専門にならないように、気をつけました。
それなりにキャラを付けられたかな、と思います。

箒は書きやすかったのが意外でした。
一夏は真とかぶり易いので扱い難いです。
千冬はキーが進みます。

さて、ストック分が無くなりましたので連続投稿はこれで終了となります。
気長にお待ち頂ければ幸いです。

次回、セシリア・オルコット編予定
今後も宜しくお願いいたします。
２０１１／１２／３１

年賀状出すの忘れた。

03―01　セシリア・オルコット1

女尊男卑。ＩＳが世にもたらしたこの不健全な風潮は、残念な事に私の生活にもその手を伸ばした。私の周囲には思慮深い女性が多かったが、それでも無関係ではいられず特に会社員時代に飲まされた苦渋は1度や2度では無い。今となっては恥ずかしい限りだが、彼女もまたそのような人達と思い込んでしまった。もっともそれが切っ掛けで彼女との深い交友を得られたのだから、この風潮を一概に否定出来ないのが悩ましいのである。

「「蒼月君クラス代表おめでとー」」
「みんな、厄介事押しつけられたとか思ってないか？」
「やだなー世界でたった2人の男の子だしクラスで持ち上げないとねー」
「それにこういうことは年上にしか出来ないって♪」

不覚にもリーブス先生の術中に陥った私はクラス代表に任じられ、彼女らクラスメイトから祝辞を頂いていた。2組の女性陣もまったく調子が良いものだ。今後も何かと押しつけられるのではと思うも、受け入れてくれた彼女らを見ていると強くも言えない。幸先不安である。一夏がやってきたのは私が彼女らと談笑していた、そんな時だった。

クラスメイトから一夏が来ている事を知らされた私は何事かと思いつつも出迎えた。一夏は出入り口の扉に体を預けて、すこし疲れているようだった。何かあったのだろうか。そういえば隣の1組が

騒がしかったのが気にかかる。とはいえ篠ノ之さんの件が今朝あったばかりなのだ。今日はゆっくりしたい。

「どうしたんだよ一夏、何か用か。」
「つれない事言うなよ、男同士もっと親睦を深めようぜ。」
「本音は？」
「クラスに居づらい、と言うかしんどくてさ・・・ 真がうらやましいぜ。」

一夏が私の談笑相手をちらと見ると小さいため息をついた。なるほど、一夏はまだクラスメイトと和めていないのだろう。考えてみればまだ2日目だが、こいつが幼なじみの篠ノ之さん以外を疎かにしたのは想像難くない。心中は察するが「しんどい」は酷いだろう。

「あのな、一夏。気持ちはよく解る。しかし彼女らとは1年間同じクラスで学ぶ仲だ。下手すれば3年間。ちゃんと関係作っておかないと後々つらいぞ。」
「それは分かってるんだけどさ・・・ そっちは順調そうだよな。」
「みんな良い娘ばかりだからな。なんなら紹介しようか？」

「はいはいはーい。ただ今ご紹介にあずかりました相川清香。趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ。よろしくお願いしまーす！」

機会を伺っていたのか、一夏の返答前に相川さんが突如躍り出た。笑顔でくるりと踊ると、ふわっと短めの髪とスカートが宙に舞う。私は彼女の人当たりの良さに好感を持っていた。だが私は残念な事を彼女に告げなくてはならなかった。

「清香。俺紹介してない。」
「今大事なところ何だから空気読んで。」

「あと後ろ。」
「なによ。」

握手を求める手はそのままに彼女が振り返ると、表現に困る数名の少女らが影の様に揺らいでいた。相川さん抜け駆けは許さないよ、清香少し頭冷やそうか、と音だか声だか判断つきかねる言葉と共に、彼女はどこかへ連れ去られてしまった。そして、どこからか相川さんの悲鳴が聞こえた。人選を誤ったようだ。いや選していないのだが。ばつが悪い私に対し一夏は意外にも好意的な感想を述べた。

「ほんと、いい人達が多そうだ。」
「・・・そう思うのか？」
「おう。」

この認識の不一致がどうして生じたのか、私はその身をもって知る事になる。

ともかくクラスメイトとの交流をだな、と一夏に助言していたとき背後から声を掛けられた。彼女は外国人だった。眼は透き通るような青で、その髪は日の光でその有り様を変える、まごう事なき金髪碧眼の美少女であった。立ち振る舞いといい香水といい、一目で育ちの良さが分かる。しかるべき舞台であれば更に見栄えが違うのであろう。なるほど、これは写真以上である。

だが見目麗しい彼女を前に一夏が随分と渋い顔をしているのはどう

いう了見だ。

「貴方が2番目の方かしら。」

「そうだけど、なにか用？」

「まぁ！なんですのそのお返事は。私に話し掛けられただけでも光栄なのですから、それ相応の態度をなさい。」

「えっと．．．。」

私は短い思案のあと軽く息を吐いて彼女に跪いた。彼女はさも当然の如く両の手を腰に当て、胸を反らした。一夏がおいおい、と声を掛けてくる。周囲がざわつく。私は跪いたまま顔を上げ両手を広げこう言った。

「あぁ麗しの君よ！何故憂いの霧でその身を隠されるのか！その瞳は我が魂、その髪は我が体。その霧を晴らす為なら、この身を万の刃に晒す事など厭わぬものを！」

辺りが静まりかえる。呆気にとられた彼女の頬が次第に赤みがかり、私はこう続けた。

「ただし心の綺麗な人げんてー」

辺りに鈍い音が響き渡る。一夏が微動だにしていないのが、無念だ。まぁ惚けた顔をしているので良しとする。彼女は、顔をこわばらせていた。

「あ、あ、あなた私を侮辱してますのっ！？」

私が汚れた膝を手で払っていると、彼女が同じ赤だがやはり少し違う赤で詰め寄ってきた。ＩＳが世に知られてから女尊男卑の風潮

が世界中に蔓延している事は知っている。彼女ほどともなれば実力もあるのだろうが、だからと言って馬鹿正直にとりあう義理も無い。

「イギリスは知らないけど、日本では君のような人を心が綺麗とは言わないんだよ。ミス・オルコット。」

「真、知ってるのか？」

「すこしね。イギリス国家代表で専用機持ちのエリートって程度だけど。」

「そう！私はエリートなのですわ！本来なら私のような神に選ばれし者と学びを共にするだけでも奇跡！」

エリートという言葉で我を取り戻したのか、彼女は見下すように私を指さした。

「あなた方は己の身分を弁えなさい！」

０３－０１　セシリア・オルコット１（後書き）

２０１２年です。セシリア編スタートです。
今年も引き続き宜しくお願いします。

03－02　セシリア・オルコット2

彼女は険しい表情を私たちに向けている。騒ぎを聞きつけた生徒達が廊下に溢れ、私たちを取り囲み始めた。各々が囁くように思惑を話し合っている。彼女の整った容姿とその尊大な振る舞いに当てられたとはいえ、冷やかしたのは私の失策だった。これ以上の騒ぎはまずい。それに彼女は1組だ、クラス間の問題になると面倒な事になる。彼女に頭を下げるのは不本意だったが、私は彼女に謝罪した。だが彼女は事を荒立てないという、私の思惑など全く頭に無かったようだ。彼女はあくまで自身の自尊心を守り、そして私の逆鱗に触れた。

「・・・ふぅ。所詮極東の猿は猿でしたわね。多少は知性があるかと思ったのですけれど、とんだ無駄足ですわ。」

詰めよろうとした一夏を俺は手で制し、彼女を両の眼で捕らえる。自分が変わったのが自分でも分かった。堅くなった雰囲気に周囲の雑踏が消えた。彼女は一瞬怯んだようだったが、直ぐに不遜な表情で自身の髪を手ですくい、続けた。

「今なんと言った？」

「あら、お気に召しませんかしら。極東の猿、これ以上相応しい名はなくてよ。」

「この極東の、猿とは日、本人の事か。」

「他に無いでしょう？」

俺の中の何かが弾けた。世界が色あせモノクロになる。形を得た音が俺の周りを漂い始め、そして感覚が痛むほど冴えた。臭い。こ

の女、臭くて反吐がでそうだ。

「あのさぁアンタ。」

自分が呼ばれたと理解するのに時間を要したこの女は暫くしてから顔を歪ませ赤くした。豹変した俺を一夏が驚いたように見ている。

「アンタが自分を卑下して悦に浸る、ちょっと変わった性的嗜好を持っているのは良く分かった。けどな変態と知り合う趣味は無いんだ。さっさと失せろ。」

「な、なんですって！」

「そりゃそうだろ。その猿（日本人）の作った物（ＩＳ）を着て喜んでいるなんて、変態じゃ無ければ、なんだ。道化か？」

「このセシリア・オルコットに向かって何という暴言・・・決闘ですわ！」

「断る。」

「あら、殿方が逃げるおつもりかしら。ならば猿にも劣りましてよ！」

あんな事を口走ったんだ。ごめんで済ます逃げ道など残さん。そのゴミ臭い面を惨めな泣きっ面にしないと気が収まらないんだよ！

「俺に利が無い。それに言った筈だ変態と関わる趣味は無ぇ。プライドとやらを守りたいなら国へ帰りな。それともおうちの外は初めてか？ならパパにでも泣きついたらどうだ。助けてってな。」

視界が一瞬白くなる。左手に掴んだ物が投げられたハンカチと気づいたのは、オルコットの全く余裕が無くなった顔を見てからだった。

「決闘ですわ。」
「くどい。」
「よろしい、貴方が勝てばこのセシリア・オルコットを好きになさい。焼くなり煮るなりお好きなように。」
「いいだろう。後で泣いても取り消さんぞ。」
「結構。猿２匹処断する手間が省けるというものだわ。」

何の事かと一夏を見ると、こいつも決闘を申し込まれた事を聞かされた。見境なしか、この狂犬。

「面白い事になっているじゃない。」

いつの間に来ていたのかリーブス先生が後ろから声をかけてきた。俺らの殺気だった空気を物ともせず歩み寄ってくる。そしてその後ろには、あの人の姿も、あった。

「話は聞かせて貰ったわ。真ちゃん、ＩＳは手配しておくから安心なさい。」

千冬さんが元々１組の問題でと詰め寄るが、彼女は意にも介さずいつも通りの柔らかい表情でこう続けた。

「良いじゃない。この子達の良い“切っ掛け”になるわ。それに織斑先生、あの真ちゃんがこうなった理由が分からない訳では無いのでしょう？」

千冬さんは私をちらと見ると渋々納得したようだった。彼女から決闘は来週月曜日の放課後、第３アリーナで行う事を知らされた。

「・・・話はまとまったな。一週間後が楽しみだよ。」

「本当に。これ程待ち遠しいのは生まれて初めてですわ。」

最悪だ。

頭を手すりにぶつけ、髪をかきむしる。心地良い屋上の風景が今はあまりにもわびしく見えた。蒼月真、お前はあの醜態をさらすためにその名前を名乗っているのか。

極東の猿、恐らくあの娘は余り深く考えずに発言した。敢えて言えば一夏と私に対してだろう。だがその言葉を聞いた時、その意味を理解した時、それにあの人が含まれていると一瞬でも考えた時、私は自分を抑える事が出来なかった。あれが１５歳の少女に向けて良い言葉か。考えるまでも無くやり過ぎだ。更に己の復讐心を満たすため挑発までしたのだ。無様にも程がある。

「４限目さぼってしまったな・・・。」

聞く相手も居ない屋上で私は独りごちる。あの後我に返った私は生徒がクラスに戻る混雑に紛れ屋上に逃げた。とても授業を受ける気分になれなかった。クラスの皆に嫌われたかも知れない。今思い出せばオルコットととの喧嘩の最中、周囲の彼女たちは怯えていた。

その中に2組の生徒もいた。当然だろう、あんな事をしでかしたのだから。だが賽は投げられてしまったのだ。最早無かった事には出来まい。私は深くため息をついた。全くと言って良いほど気が進まなかった。

もうどうなろうと知った事では無い、負けても構わないと卑屈な心に支配されかかった時、布仏さんが側に居ると気づいた。それ程までに塞ぎ込んでいたのかと自分を嘲笑した。そしてそんな自分を彼女に見せたくないと思った。

「済まないけど1人にしてくれないか。きっと酷い顔をしているから。」

「真くんは大切な人を思って怒ったんだよね？」

私は彼女の言葉が理解できず、振り返りもせずじっとしていた。

「みんな怒ってないよ、心配してるよ。だから早く帰ってきてね。」

彼女はいつもの優しい声でそれだけ言うと足早に階段を下りていった。

彼女の暖かく柔らかい空気がとても心地よかった。視界がぼやける。私が涙もろいとは知らなかった。海の風が優しく凪いだ。帰る、か。・・・そうだな自分だけいつまでも黄昏れている訳にもいくまい。クラスの皆にも迷惑を掛けたのだ。私はようやく腰を上げた。

「「おそーい！」」

私を出迎えたのは彼女らの笑顔と元気な声だった。皆は私の帰りが遅い事を口々に非難してきた。昼休みがどうとか、昼食がどうとか、あの一件についてだれも非難しなかった。正直に言えば叱咤されこそあれ激励を受けるなど考えてもみなかった。皆は何も変わっていなかった。私はその予想外の事になんで、と言うのが精一杯だった。

「酷い事言ったのはお互い様だしね！」

「日本人を馬鹿にされて怒っているのは蒼月君だけじゃないってこと！」

「私は日本人ではないけど彼女は酷いと思う。」

「オルコットさんなんてこてんぱんにしちゃってよ！」

「みんな．．．」彼女らの気遣いが身に染みる。全ての不安が一転安堵に変わった。しまったこれはもう泣きそうだ。

「あー蒼月さん泣いてるー」

「年上なのにねー、男の子なのにねー」

「う、うるせー、泣いてない！安心してない！喜んでない！」

ツンデレ入りましたー、と誰かが笑った。布仏さんは両の手を合わせて喜んでいた。鷹月さんは眼が合うと黙って頷いた。なんと言う事だ、これでは適当に済ます事など出来ないでは無いか。そうぼやいた口とは裏腹に体に力が満ちていくのを私は感じた。

０３－０２　セシリア・オルコット２（後書き）

ごめんなさい、もうしわけありません、許して下さい。
オルコッ党の皆様方、まこっとーに失礼しました。
演技です、演出です、ご理解とご協力の程・・・だめっすか？
こういうのはこれが最初で最後ですのでご容赦の程を。たぶん。

次回はギャグパート予定。
それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3504z/

HEROES インフィニット・ストラトス

2012年1月13日23時57分発行